様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 13 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2005～2008　※2006 年度交付留保
課題番号：17730446
研究課題名（和文）　女性教師のキャリア形成におけるジェンダーの機能

研究課題名（英文）　Gender and Teachers' Career in the primary school

研究代表者
浅井　幸子　（ASAI Sachiko）
和光大学　現代人間学部　専任講師
研究者番号：30361596

研究成果の概要：
本研究では、教職におけるジェンダーの解明を目指した。当初は女性教師のキャリアインタビューを通して教職におけるジェンダーへの接近を試みようと考えていた。しかしパイロットインタビューを行った結果、とりわけ小学校では、女性教師よりもジェンダーマイノリティである男性教師の経験を検討した方が、教師の仕事におけるジェンダーの機能が明確に見えてくることがわかった。それゆえ本研究では、小学校の男性教師 10 名に対するキャリアインタビューを行い、以下のことを明らかにした。①低学年よりも高学年に男性を多く配置するジェンダー不均衡は、高学年を学校の中心に置き、子どもたちを力で管理しようとする男性的な学校運営を背景としている。②その不均衡な配置を通して、低学年よりも高学年を重視する文化と女性教師への差別が再生産されている。③低学年教育は、しつけを中心とする点において女性化された特徴を有している。④長く低学年を担任する男性教師は、女性化された低学年文化と交渉することによって、異なる低学年教育を編み出している。
また小学校における教職の女性化の歴史的な過程を検討し、以下のことを明らかにした。①近代日本における女性教師の増加は、学校の教師を家庭の母親になぞらえる比喩によって推進された。②母親や妻にたとえられた女性教師には、女子教育、幼児教育、裁縫や家事の教育、洗濯や接待といった学校の雑事が配分された。③同時に女性教師には、知的な「修養」が求められた。④女性教師には男性並みの教師であることと女性的な役割をこなすことの双方を求められたといえる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	700,000	0	700,000
2006 年度	0	0	0
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	2,100,000	210,000	2,310,000

研究分野：教育学
科研費の分科・細目：教育学
キーワード：ジェンダー　女性教師　男性教師　教師文化　学年配置

１．研究開始当初の背景

（１） 教職の女性化

女性教師は小学校教師の 60%以上、中学校教師の約 40%以上を占めている。近代学校の成立以降、女性教師の比率は右肩上がりに増大してきた。教師文化の歴史を特徴づけるこの事実は、教師文化の研究におけるジェンダーの視点の導入を要請していると考えた。

（２） 性差別と性別役割分業

小学校や中学校において、管理職の男女比率、担当する学年や教科の男女比率、中途退職者の男女比率といったデータは、教職における性による格差の存在を示している。しかしそのような男女格差が生み出される構造や、女性教師の性差別の経験については、未だ不明な部分が大きい。そこで教職における性差別と性別役割分業の様相を明らかにする必要があると考えた。

（３） 女性教師の経験

従来の教師のキャリア研究は、男性教師を標準にしていた。それは女性が過半数を占めている教職の実態にあわないと考えられる。女性教師の経験をふまえたキャリア研究が必要とされると考えた。

２．研究の目的

（１）教師文化のジェンダー構造

女性教師のキャリア形成の検討を通して、教師文化のジェンダー構造の解明を目指した。具体的には、キャリアに関するインタビューを行い、そこに内包される性差別と性別役割分業の様相を検討することを目指した。なおここでいうキャリアは、主観的かつ個人的な側面を持つ職歴を内包した経験という広い定義を採用した。職業のステージをより責任ある地位へと昇進する職歴という狭いキャリア定義では、管理職への昇進を選択しない教師の経験を扱えないからである。

（２）教職の女性化

現在の教師文化のジェンダー構造を検討するうえで、男性占有職から女性の多い職へという小学校教師の歴史的な変遷において、どのようなジェンダーが形成されたかということをふまえる必要がある。ところがその過程の歴史的な検討はあまり行われてきていない。そこで、現在の教師文化のジェンダー構造の検討とあわせて、その歴史的な背景の解明を目指すこととした。

３．研究の方法

（１）インタビュー調査

小学校におけるジェンダー構造を検討するために、女性教師と男性教師のキャリアインタビューをパイロット調査として行った。その結果、女性教師のキャリアには家庭の事情が濃厚に反映されてしまうこと、性別役割分業の様相はジェンダーマイノリティである男性教師のキャリアに明確に現れていることから、男性教師にキャリアインタビューを行うことにした。

具体的には、10 名の男性教師のキャリアの聞き取りと検討を行った。その際に、学年配置の経験に着目した。それは教師の仕事の性による差異をデータにおいて検討したところ、低学年に男性教師が少ないということが大きな特徴の一つとして浮上したからである。インタビューを依頼する際には、多様な世代を含むこと、管理職コースをたどった教師とそうでない教師を含むこと、例外的に低学年経験を多く積んだ教師を含むことの三点に留意した。

調査の手順としては、対象者にあらかじめ教職経験の概略を記した年表の作成を依頼し、その年表に即して２時間から４時間のインタビューを行った。「教師になろうとしたきっかけは何ですか」という質問から出発して、対象者に自由に語ってもらった。インタビューはカセットテープならびにＩＣレコーダーに録音し、文字化して年表とともに分析資料として活用した。

（２）文献調査

国内外の関連する先行研究の収集と検討を行った。教職をジェンダーの観点から検討した国内および英語圏の研究を網羅的に収集し、分類と整理を試みた。教師の仕事とジェンダーについては、とりわけイギリスの教育社会学において幅広い研究が蓄積されてきている。またアメリカでは、教師の仕事を「ケアリング」という観点から検討する研究が行われてきている。

（３）歴史研究

教職のジェンダーは歴史的な女性化の過程において構成されている。その過程を明らかにするために、明治から昭和初期の教育雑誌を中心に女性教師に関する文献を収集し、その検討を行った。明治から昭和初期にかけて、小学校における女性教師の比率は一貫して高まっている。その過程においてとりわけ着目すべきなのは、1910 年代における「女教員問題」の議論である。これまで「女教員問

題」の議論は、女性教師がどれだけ差別的な扱いを受けてきたかということを述べる文脈において解釈されてきた。その重要性は明らかだが、同じく重要な観点として、その議論を通して女性教師の学校教育における位置づけが行われたこと、すなわち学校における性別役割分業が形成された事実に着目する必要がある。本研究ではその過程を、教職の女性化によるジェンダー形成の過程として検討した。

４．研究成果

（１）インタビュー調査

小学校では低学年担任における男性教師の比率が低い。その事実をふまえて、小学校の男性教師 10 名に対するキャリアインタビューを通して、小学校における教職のジェンダー構造への接近を試みた。とりわけ学年配置とその学年における教育実践の経験を語ってもらい、検討を経て、小学校の学年配置におけるジェンダー不均衡の背景と様相を二つの研究にまとめた。

①学年配置のジェンダー構造

一つめの研究では、学年配置の不均衡に現れた性差別の解明を目指した。具体的には、男性教師 10 名がどのように高学年／低学年に配置されたかを検討し、以下のことを明らかにした。低学年よりも高学年に男性を多く配置するジェンダー不均衡は、高学年を学校の中心に置き、子どもたちを力で管理しようとする男性的な学校運営を背景としている。また、その不均衡な配置を通して、低学年よりも高学年を重視する文化と女性教師への差別が再生産されている。これらの見解は、論文「小学校における学年配置のジェンダー不均衡―男性教師へのインタビューを通して―」として、現在投稿準備中である。

②低学年教育の女性化

二つめの研究では、男性教師における低学年担任の経験を、ジェンダーマイノリティ研究の視点から検討することによって、女性化された低学年教育の様相の解明を目指した。その結果、以下のことがわかった。中学年や高学年の担任を長期に経験した後に低学年を担任した男性教師は、低学年教育の文化に違和を感じることが多い。それは低学年教育が、しつけを中心とする点において女性化された特徴を有しているからである。また長く低学年を担任する男性教師は、女性化された低学年文化と交渉することによって、異なる低学年教育を編み出している。それはカリキュラムの再考というかたちをとったり、低学年の子どもの再発見というかたちをとったりしつつ、しつけ中心とはことなる低学年教育を生み出している。

これらの見解は、論文「小学校の男性教師における低学年担任の経験―インタビューから―」として投稿準備中である。

（２）文献調査

教師の仕事とジェンダーに関する国内の研究には、女性教師の管理職への参入を検討するもの、女性職である保育職への男性の参入を検討するもの、特定の教科（体育、家庭科など）におけるジェンダーカルチャーを検討するものなどがある。海外ではそれに加えて、ジェンダーマイノリティとしての男性教師の葛藤を検討する研究、そして女性化された教職の特徴をケアという観点から検討する理論的および実践的な研究が蓄積されている。以上のような研究を網羅的に収集し、レビュー論文を作成している（準備中）。

（３）歴史研究

小学校における教職の女性化の歴史的な過程を検討し、以下のことを明らかにした。

第一に、近代日本における女性教師の増加は、アメリカの初等教育を模して推進され、1900 年前後に急激な実現をみた。その際に女性化を正当化し推進した論理は、学校の教師を家庭の母親になぞらえることで女性を理想の教師として表象するものだった。

第二に、女性教師の急増を受けて展開された 1910 年代の「女教員問題」の議論において、女性教師のジェンダーが構築された。一方で女性教師は、母親や妻にたとえられ、女児や幼児の教育、裁縫や家事の教育、洗濯や接待といった雑事が割り振られた。高学年の男子の教育からは排除された。しかしもう一方で、女性教師の急増を初等教育の危機として感受した論者は、女性教師に知的な「修養」を求めた。女性教師は学校の仕事と家庭の仕事の二重負担を背負わされていたばかりでなく、学校においても男性並みの教師であることと女性的な役割をこなすことの双方を求められたといえる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

浅井幸子「近代日本における初等教育の女性化―小学校におけるジェンダーの形成過程―」『和光大学人間関係学部紀要』10 巻、第２分冊４号、2005 年、29－42 頁、査読無。

〔学会発表〕（計　１件）

黒田友紀、杉山二季、玉城久美子、望月一枝、浅井幸子「男性小学校教師における低学年担

任の経験」日本教師教育学会第 16 回研究大会、於山梨大学、2006 年 9 月 23 日。

〔図書〕（計　件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
浅井　幸子（ASAI Sachiko）
和光大学・現代人間学部・専任講師
研究者番号：30361596

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：